



# インド福祉村病院落成式決定

クシナガラ(北インド・UPP州) 1998年3月27日

# 落成式を迎えて

理事長 山本孝之(福祉村病院院長)

インド福祉村協会と現地アーナンド協会との合同主催で、建設中のインド福祉村病院(現地名アーナンダ病院)の落成式が1998年3月27日にクシナガラ(北インド・UPP州)に行われることが決定しました。

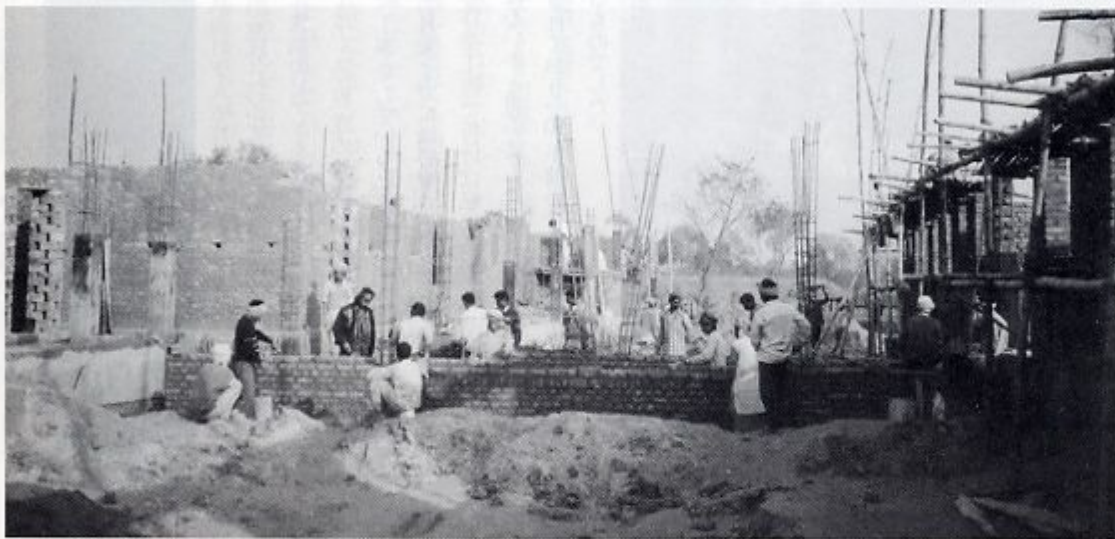
現在急ピッチで進行中の病院建設は昨年中に基礎工事が完成して、2月現在、床・壁・屋根をレンガを一つ一つ積み上げて構築しつつあります。落成式までに診療棟、管理棟の二棟が完成される予定です。

## クシナガラに20床の新しい病院 の落成式

クシナガラ(北インド)の新しい病院の落成式は、3月27日(日)にクシナガラ(北インド)の新しい病院の落成式が行われます。この病院は、インド福祉村協会と現地アーナンド協会との合同主催で、建設中のインド福祉村病院(現地名アーナンダ病院)の落成式が1998年3月27日にクシナガラ(北インド・UPP州)に行われることが決定しました。



地元新聞の紹介



インドの人々の幸せと健康に役立つ働きがしたいと発願してから、はや十年以上が経ちましたが、やっとインド福祉村病院の落成を迎えることができ、まさに感慨無量でございます。

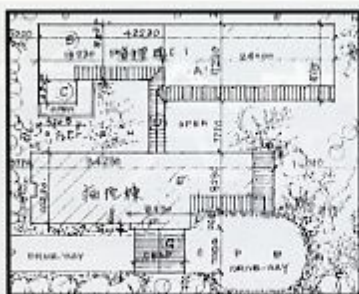
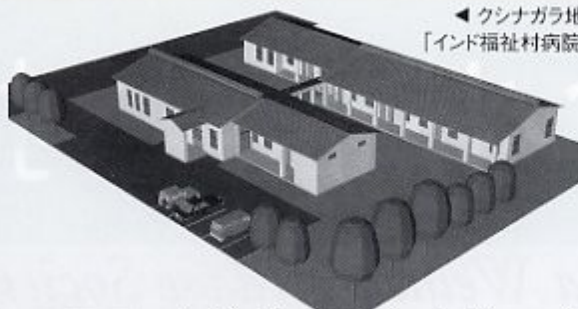
ここまでたどりつけたのも、ひとえに非常に多くの皆さまのご協力とご支援のおかげですので、心かなる感謝を捧げたいと思います。

今後我々は、この病院でのチャリティ診療の人々との交流を深めて、現地の実状把握に努め、インドが現在最も必要とする福祉施設や教育施設を作ることにより、インドの皆さんの一生の幸せを守る働きを続けて行きたいと考えておりますので、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

# 病院建設の現況報告

常務理事 柴田昌雄  
(愛知学院大学教授)

◀クシナガラ地区に建設される「インド福祉村病院」の完成予想図。



建設現場(12月)

昨年十二月十九日、私はクシナガラのインド福祉村病院建設の現地に入りました。朝夕はセーターが必要な位の寒さでしたが、日中はこちら(東海地方)の三月頃の快適な気温でした。

私の目に建設現場が映ったとき、約30名以上の作業員がそれぞれ忙しく働いており、基礎のレンガが地上より一メートル位積み重ねられ、殆ど完成していました。建設総監督のレマーン氏と工事総監督のバンデアー氏との案内で、建設現場を詳しく視察しました。基礎工事は地面より約60センチメートル位掘って破砕したレンガをそこに敷き、固めた上レンガを積んでいく工法をとっていました。その巾は約50センチメートル位でした。

柱の部分については底に鉄筋のプレートを敷き、その上に鉄筋のピラーを立てていました。私の印象としては、この程度の建物としては、かなりしっかりとした工事をしていると感じました。前述の両監督とも三月末までには必ず完成させると述べていました。この作業工程で行けば私も約束通りに出来上がるのではないかと思います。作業は殆どが人力によつてなされており、50年前の日本の建築作業を彷彿とさせるものでした。

基礎が出来上がった段階でも、想像していた以上の大きい建物であるとの感を深くしました。完成後はおそらくこの地域では最も素晴らしい病院になるのではないかと思います。

多くの方々のご支援により、インド福祉村病院の建設がここまで進行したことを目の当たりにして、私は感無量の感を禁じえませんでした。そして何時までも建設現場を眺めていました。 合掌



## インド福祉村病院落成式参列と仏教遺跡巡拝の旅

- Aコース 平成10年3月25日(水)～4月1日(水)＝8日間＝旅行代金 315,000円
- Bコース 平成10年3月25日(水)～3月29日(日)＝5日間＝旅行代金 258,000円

空港→デリー→クシナガラ(福祉村病院落成式典、釈尊入滅の地)→ベナレス(釈尊説法の地)【これ以後はAコースのみ】→ブダガヤ(釈尊成道の地)→ラジギール(王舎城跡)→ナーランダ大学(玄奘三蔵の留学の地)→デリー→関西国際空港

申し込み先 KKトラベルサライ  
〒541-0047大阪市中央区淡路町3-2-8トーア紡第2ビル

◆フリーダイヤル  
0120-408-128

# シルシア部落(クシナガラ)の人々

評議員 大竹紘一

# クシナガラへの想い

評議員 藤田亜矢子

平成9年1月に福祉村病院の起工式が挙行されて以来、種々の問題点が浮上し工事の開始が遅れておりました。昨年9月より3ヶ月間その問題を解決し、少しでも早く地元の人々に貢献すべく、インド国内を飛び回り、アーナンダ・ミッション(現地法人)の協力のもとに11月1日より、本格的病院建設工事が始まりました。工事は地元ゴラール市のK.K.グンディ会社が請け負い、多数の工事関係者が参入しておりますが、工事人夫は近くのシルシア部落の人々が主で、約60名が働いていました。

北インド、クシナガラ町は丁度三アラーとカルカッタのほぼ中間で、ネパールの国境近くに位置し、積算入減の土地です。福祉村病院は釈摩涅槃堂から約4km離れた純農村地帯でシルシア部落の中にあります。地元の人々は早く建設され、病気を診てほしいと期待する声が非常に強く、早期建設の要望書も多数寄せられ、現地の新聞にも取り上げられたりしております。

病院の回りには多数の部落が点在し、いったいどれだけの人々がこの病院の受診希望なのか正確には把握できないのが現状です。というのは、2、3日もかけて徒歩にて患者が集まってくる可能性があるので、今後の検討すべき重大な問題です。

部落の人々にはマリアは勿論、甲状腺腫、消化器病、眼病、皮膚病、また赤痢、結核などの感染症が多く、新生児死亡率も高く、現地では



建設現場(2月)



建設現場(12月)

医療が渴望されております。

なりより問題であるのは、大都市には政府の病院や、小都市にはアーユルベダーの個人病院がありますが、診察を受けても医療品を購入できないケースがしばしばみられることです。また、同じ家庭に大家族(親族)回が一緒に生活していて衛生意識が薄いため、感染症が容易に広がることしばしば見られます。

このインドの田舎の人々は本当に良い人が多く、親切で真面目で人が良く、少しでも生活上に手助けしてあげたい気持ちにさせられます。問題は山積みしておりますが、何百名という日本の志ある人々の支援を思い、またインドの子供たちを考えると、本当に心をひとつにして「みんなの力でみんなの一生の幸せと健康をまもる」(山本理事長の言葉)ための行動が大切だと思います。

1997年6月11日、私にとって3回目のインドの地、今回は今までの短期の旅とは違い、インドの医療習慣、文化を学びたく5ヶ月の予定で渡印しました。最初の2ヶ月は、インドの大病院であるSGPGI(Sanjay Gandhi Post Graduate Institute of Medical Science)でインドの医療状況を学んだ。私は「Dr.Mishra率いる内分泌内科の医療メンバーとして、農村地帯での青空診療及び病院の外来、病棟など各セクションの見学と実演により病院で働く人々の仕事内容(特に看護婦の役割)と運営法を学んだ。それとともに、衛生材料、医療機器、薬品などについてもチェックすることができた。そして、2ヶ月が過ぎたころより、もともと地域の人々の中に入り、インドの習慣、文化に触れたく、JICAの方の紹介により、マザーテレサの施設(Missionaries of charity Joyti Nagar)の孤児院(シシバワン)に移ることもあった。



建設現場(2月)



ラクノー・マザーテレサ施設



Yako Fujita: working for a noble cause in Lucknow

Helper from Japan

glimpse into Mother Teresa's before she flies back to Japan all amenities ensured

地元新聞の紹介

ここには、60人程の子供たちが共同生活しており、私は、子供たちの世話をしながら、子供たちと同じ生活をする事で、同じ気持ちになり、様々な事と様々な思いを経験することとなった。毎日の生活から、私には子供たちの素直さ、たくましさ、生に対する力強さがまぶしいくらい輝いてみえた。

その後、デリーのスラム街で、NGOのグループのお手伝いをする機会もあり、ここでは、その地域で生きる人々のニーズに添った健康衛生活動のノウハウを学ぶことができた。また、ここで改めてボランティアをしていく上で大切ないくつかの点に気付かされた。

それは、私がスラム街で子供たちとビー玉遊び

をしていたときのことだ。子供たちはビー玉遊びが終わると、その大切なビー玉を手のひらにのせて、私の方へむけた。それをくれるというのだ。私はとてもうれしくて、ありがたうという気持ちとともに、自分の中でショックを感じた。それまで彼らがそばに寄ってくる何か物を乞われるのではないかとひやひやしていた自分がいた。ところが、子供たちは、物を乞うどころか、自分の大切な遊び道具を私にくれるというのだ。いつのまにか「施す立場」と意識していた自分に気が付き恥ずかしくなった。

この様ないくつもの貴重な経験を胸に、私のインドでの生活は終わった。これらの経験をクシナガラ病院に役立てていくのが、私の念願である。しかし、決してこのインドの人たちを助けたいというそんなおこがましい気持ちにはならないだろう。それは、5ヶ月間の経験から感じた大きな思いである。

私はこのクシナガラの病院を通じて、インドの人たちと楽しい生活を送れる様、お互いを高めあっていたらよいとささやかな想いを抱いている。

## 募金のお願い!

私達はインドの人々に医療と生活改善を無料で行うことを目的としております。

インドは最近特にインフレ状態にあり建設費も高騰しております。

建設後も医療器具、備品、維持費に相当不足が見込まれます。

みなさんにお寄せいただいた善意はAPIC(国際協力推進協会)事業団を通じて

インド・アーナンダ協会に寄付され活動に使わせていただきます。

少しでもあなたの善意を分けて下さい。

寄付先/住友銀行 東京公務部 普901404(財)国際協力推進協会「ブダガヤ病院建設」口  
問い合わせ先/インド福祉村協会事務局

■募金/別紙銀行振り替え用紙にて下記口座へご送金下さい。

この募金については税法上の優遇措置がとられます。確定申告時にご提出下さい。

■振込先/住友銀行 東京公務部 普901404

(財)国際協力推進協会「ブダガヤ病院建設」口

発行者 インド福祉村協会(IWVS)

発行人 大竹紘一

編集協力 文創社

インド福祉村事務局

〒441-8124 愛知県豊橋市野依町山中19-12

TEL0532-48-1138 FAX0532-48-2365